



あけぼの

第44号 2019. 3. 1
宇和特別支援学校
(知的障がい部門)
図書館発行

中学・高校生の頃は、読書感想文のための読書でしたが、大学生の頃からは、小説よりエッセイ集を好んで読むようになりました。人として、親として自分がどう振る舞えばよいか分からなくなってきたとき、自然と足が本屋に向かっていました。

「私の趣味は読書です。」と言えるほど本を読むわけはありませんが、私は本を読むことが好きです。小学生の頃の私は、本の主人公になってあれこれと空想するのが好きでした。ある時は優等生の小学生だったり、ある時は勇敢に困難に立ち向かう少女だったり。今考えてみると、「そんな主人公に憧れ、そうはなれそうもないけどどなたならいいな。」と、少なからず本の影響を受けて頑張っていた？ように思います。文字から飛び込んでくる主人公をイメージしてあれこれ想像する時間は、とても楽しい時間でした。

「私の趣味は読書です。」と言えるほど本を読むわけはありませんが、私は本を読むことが好きです。小学生の頃の私は、本の主人公になってあれこれと空想するのが好きでした。ある時は優等生の小学生だったり、ある時は勇敢に困難に立ち向かう少女だったり。今考えてみると、「そんな主人公に憧れ、そうはなれそうもないけどどなたならいいな。」と、少なからず本の影響を受けて頑張っていた？ように思います。文字から飛び込んでくる主人公をイメージしてあれこれ想像する時間は、とても楽しい時間でした。



林田 玲子

「私と読書」

「本を読まないからといって生活に困るわけではない。健康を害するわけでもないが、本を読む楽しさを知らないまま人生を終わってしまうのは惜しい。おいしい料理の味を知らず、最も身近に寄り添ってくれる親友を知らぬまま、味気ない一生を過ごすことはもったいない。」これは、作家重兼芳子さんが言われた言葉です。本は、私たちの生き方を豊かに変えてくれます。良き本に出会えることを楽しみに、本を読んでみませんか？

小学校の「としよしつ」、図鑑の写真や挿絵に目を奪われ熱中し、ダイホンバンという言葉を知りました。中学校の図書室、軟式庭球部の練習が忙しかったのか、図書室に行くことが少なかったように思います。



渡邊 俊

「図書館の思い出」

話をしたり、勉強したりしました。ですが、本を読んでいた記憶があまりないような気がします。大学の図書館、本や論文をブンケンと呼び、四年生のときには、卒業論文を書くために必要な文献を探して毎日通っていました。学校を卒業して、教師になって勤めた学校の図書室、教科書に出ている古典作品が書かれた時代の生活について調べました。平安時代のトイレのことを調べたのを思い出します。教師になってから学んだ大学院の図書館、研究に関する文献を、一日中読み続けたこともありました。今まででいちばん本を読んだ図書館でした。

市や町の図書館では、いろいろな年齢の人たちが本や雑誌や新聞を読んだり探したりしていて、落ち着きのある知性的な雰囲気を感じます。図書館の思い出を振り返ることで、何かを学ぼうとしている前向きな自分と再会したような気がしました。そして、そのときどきに図書館で過ごした豊かな時間があったことを、懐かしく思い出しました。



「おさかなちゃんばいばい」
小一星 三瀬 翔大

読書感想画 作品展



「にじいろのさかな」

小一月 沖田聖翔・塩見連

増田煌大

小一星 松下晟風

小二星 河野凌大・三瀬翔大

小二月 木村彩里・高橋幸笑

山内美優



「きんぎょがにげた」

中二C 上野 拓海

「そらめくんのベッド」

中二C 宇都宮 諒

「さかなの食事」

高一年F 山下 真由



「カレーをつくろう！」
中二B 白石 一真



「おいしいカレーライス」
中二B 徳田 遥希



「学校の怪談」
高三F 南埜 勇人





読書感想文

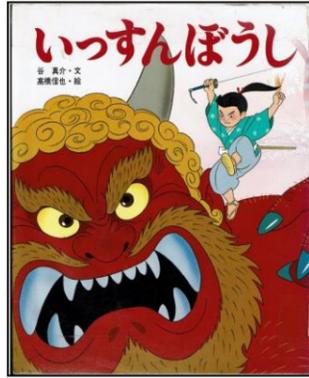


『一寸法師』を読んで

高等部一年F組 寺谷 和真

「一寸法師」を読んで、すごいと思ったところが二つ、学んだところが一つありました。すごいと思ったところでは、一つ目は、お椀の舟をこいで、何日もかけて都に行く場面です。小さい体です。鬼の力持ち主だなど思いました。二つ目は、鬼二人と戦う場面です。すぐさま青い鬼に食べられてしまう場面です。何も見えないくらい真つ暗の中でも勇気を持って鬼の体内を暴れる一寸法師はすごいと思いました。あと、胃液で溶かされず済むなんてすごいと思いました。まさに、「小さな勇者、此処に推参！」と思いました。

学んだところでは、解説の所に書かれていた「小童子話」という類話です。「小童子話」とは、一寸法師のように不思議な誕生をして生まれてきた小さい子が主人公のお話のことです。一寸法師の他にも「桃太郎」や「かぐや姫」等の話も小童子話の一つと言われています。今度一寸法師の話とかするとき、こういう豆知識なども入れてみようと思います。僕も一寸法師に負けないくらい勇気を持って頑張ります。



『まいにちを味わう』を読んで

高等部三年G組 峯山 響

私とこの本との出会いは、書店に行った際、「まいにちを味わう」というこの本のタイトルが目が留まり、気になり、手に取ったことがきっかけです。この本の著者は九十九歳の女性です。東京都生まれで文化学院を卒業され、現在は家事評論家、エッセイストとして活躍されている方です。この本のタイトルの通り、まいにちを味わう方法がたくさん書かれています。内容は大きく五章に分けられています。一章は、自分らしく日々を過ごす。二章は、人生はどう変わるか、誰も予想できない。三章は、不安なまま、今を楽しむ。四章は、合う人もいれば、合わない人もいる。五章は、一日一日を大切に生きる。その中で、特に心に残った言葉を紹介します。

一章の中に、「不安はなくならない」という文章があります。「不安に思うことは、考えたり調べたり準備したりしても、不安を小さくすることはできるが、無くすことにはならない。」と書いてありました。確かに、不安を解消するため努力をしても、なにかしら心配している私があります。また、「自分の力で生きていく。なるべく人に頼らない。人に甘えてはいけない。」とも書かれています。人は自然と楽な方に流されるものではないかと思えます。甘えてはいけないと気を付けていても、一度手を借りると、もう一度お願いすることに抵抗がなくなってしまうのではないかと思えます。もちろん、誰の手も借りずに生きていくことはできません。それでも、できる限りは自分の力でやっていくんだという意思を持って生活していきたいと思いました。

五章に、「一日一日を大切に生きる」という文章がありました。「私はあまり、くよくよすることはありません。人生を順風満帆に生きてきたわけでもありません。たくさんの別れも経験してきました。しかし、大抵のことは何とかなると思っていましたし、実際に何とかなったものです。ただ、私はいつでも自分はどうしたいかという思いを強く持っていて、それが実現できるように行動してきたのです。」と書いてありました。自分がどうしたいかという強い気持ちを持つことが大事だと改めて感じました。強い思いを持つことで、ある程度は自分の思うように変えることができるかもしれません。

この本を読んで、考え方一つで人生楽しく、有意義にすることができると思いました。生きていく上で、人に合わせることも当然大切だと思いますが、全て合わせるのではなく、自分の信念を強く持ち、生活したいものです。

私は高校の三年間、学校生活が大変充実しており、毎日を堪能し、味わっていたように思います。



吉沢久子
まいにちを
味わう

しかし、近頃卒業を控え、学生生活から社会人へ変わる節目の時期に、社会人になることへの不安や、仲良くなった友達と毎日会えなくなる寂しさから、何かにすがりたい気持ちが強くなっていました。そんな中、この本と出会い、自分の気持ちを落ち着かせることができたように思います。考え方も悩みも、これからたくさん出てくると思いますが、著者のように、信念を持ち、大らかな気持ちで過ごすことが理想です。

『お母さんへ心から感謝をこめて』を読んで

高等部一年F組 濱永 一樹

僕がなぜこの本を選んだかという点、一番感謝する人が自分の親だと思ったからです。僕が一番印象に残った言葉は、「何度も迷惑を掛けてごめんなさい」という言葉です。理由は、僕は小さいころから迷惑を掛けてきたし、今でも迷惑を掛けているから、迷惑をごめんねという言葉にくっついてきたからです。僕はお母さんがいてくれてよかったなと思います。そして生んでくれてありがとうと言ってみたくて思っていました。だから今日言ってみたくて「どういたしまして」と言われました。その時笑顔ができました。お母さんの笑顔も見られてとてもよかったです。

親は、とても最高の宝物みたいなものです。理由は、親がいるから学校のことなどの相談のつてくれるので、親はいてもらわないと困るものです。自分からはこれからは大切にしていきたいです。そして、これからは親に迷惑を掛けないように気をつけていきたいです。

図書委員会活動の紹介

本校の図書委員会は、高等部一〜三年生十四人が活動しています。主な活動は、月に一回の委員会、お話会（写真上）、クリスマス会（写真下）などです。昼休みの図書館開館中には図書の整理も行っています。また、毎月行っているお話会では、絵本の読み聞かせをしたり、保健室の先生に、健康についての話をしていたりしています。お話会では、図書委員会のメンバーが絵本のページを分担し、練習をして本番に臨んでいます。いつも、沢山の児童・生徒が聞きに来てくれており、張り切っています。



多読賞



本校では、「児童・生徒の読書意欲を高める」ことを目的として、毎年多読賞の表彰を行っています。選考基準は、四月から一月までの貸し出し冊数が小学部は二十冊以上、中・高等部は五十冊以上、図書の本を借りた児童生徒としています。今年度は、五名の児童生徒が表彰されました。

小学部	四年月組	山崎 悠太	(21冊)
小学部	四年月組	山崎 惣太	(25冊)
中学部	二年B組	奥谷 維吹	(76冊)
中学部	二年C組	赤松 龍馬	(70冊)
中学部	三年B組	織田 倅成	(51冊)

私は2学期の図書委員長をさせていただきました。お話会で全校のみんなに読み聞かせをしました。毎月のお話会では読む速さを考えたり、登場人物の気持ちになって読んだりしました。いつもお話会が盛り上がり、うれしかったです。

高等部 3年G組 宮川直輝



お話会で、絵本の読み聞かせをしています。



クリスマス会でプレゼントを渡しています。